

# ヒエロニウムス「ウルガータ聖書序文」 翻訳と注解 (2)

ヨブ記、十二預言書、イザヤ書、エレミヤ書、エゼキエル書

**Jerome's Prologues of the Vulgate: Japanese Translation  
with Commentary (2)**

**Job, The Twelve Prophets, Isaiah, Jeremiah, Ezekiel**

石川 立      加藤 哲平  
Ritsu Ishikawa    Teppei Kato<sup>1</sup>

キーワード

ヒエロニウムス、聖書、ウルガータ、序文、ヨブ記、十二預言書、イザヤ書、エレミヤ書、エゼキエル書

## KEY WORDS

Jerome, the Bible, the Vulgate, Prologue, Job, The Twelve Prophets, Isaiah, Jeremiah, Ezekiel

## ヨブ記の序文

### 解 題

ヒエロニウムスは、当時流布していた LXX および古ラテン語訳ヨブ記には多くの欠落部分があることを述べ、オリゲネスがその欠落をテオドティオン訳から補ったことを説明している。そして彼がヘブライ語から直接翻訳した際には、「あるリダ出身」のユダヤ人教師の助けを得たという。このユダヤ人教師は、ヒエロニウムスが主に教えを請うた3人のユダヤ人教師の一人であり（ダニエル書序文参照）、書簡や聖書注解書などにしばしば言及がある。ヨブ記の内容説明に入ると、彼はギリシア・ラテン詩の形式を引き合いに出し、ヨブ記が詩文で書かれていることを述べている。このあた

りは、回心前には世俗の文学によく通じていたヒエロニウムスならではの説明といえよう。また後半は非常に周到な論理構成に基づいて、敵対者たちが、アクィラ、シュンマコス、テオドティオンら「ユダヤ化した異端者」の翻訳を受け入れていながら、キリスト教徒たる自分の翻訳を非難するのはおかしいと述べる。そして、仮に自分を非難するにせよ、その非難が感情的なものではなく、学問的な誠実さに則ったものであるようにと釘を刺した上で、言葉を結んでいる。序文自体は392年ごろ書かれ、名宛人は文中には出てこない<sup>2</sup>。

## 翻 訳

### ヨブ記における聖ヒエロニウムスの序文が始まる

私は、敵対者どもの讒言に、聖書のそれぞれの文書を通じて応答するよう強いられている。連中は私の翻訳を、セプトゥアギンタの翻訳者たちへの非難であるとして中傷してくるのである。あたかもギリシア人のもとでも、アクィラ、シュンマコス、そしてテオドティオンが、言葉から言葉を、あるいは意味から意味を、またあるいはその両者を混ぜ合わせて、適度に両方用いるという翻訳の方法を用いていなかったかのように<sup>(1)</sup>。また旧約聖書〈*Vetus Instrumentum*〉の全巻を<sup>(2)</sup>、オリゲネスがオベルスとアステリクスをもって区別しなかったかのように。オリゲネスはこれらの記号のもとで、付加部分やらテオドティオンから採用した部分やらを、古代の翻訳（セプトゥアギンタ）上に挿入し、付加部分が（セプトゥアギンタでは）欠けてしまっていると証明しているのである<sup>(3)</sup>。それゆえに、私の中傷者どもは、彼らが部分的にしか認めなかったもの（私の翻訳）を全面的に受け入れるか、（さもなくば）自分たち独自のアステリクスでも付けて私の翻訳を削除することを学ぶべきなのだ。というのも、連中は何者かが多くの個所を削除したと認めているが、その同者が（他の）ある個所においても過ちを犯していることを認めないわけにはいかないからである。とりわけヨブ記に関しては、もしあなたが、アステリクスの印のもとで付加されている部分を取り去ってしまおうものなら、非常に多くの部分が刈り取られることになるだろう。とはいえこれはせいぜいギリシア語（写本）での話ではある。さらにラテン語（写本）では、我々が少し前にアステリクスとオベルスを付して出版した翻訳（ヘクサプラからのラテン語訳）より以前のもの（古ラテン語訳）は<sup>(4)</sup>、ほぼ（全体で）700から800行あるわけだが<sup>(5)</sup>、それは切り詰められ、損なわれ、齧り取られた書物として、自らの無残な姿を読者に対して公然と見せつけてしまっているのである。

しかしこの翻訳（ウルガータ訳）は、古代の人々のいかなる訳にも依拠していない。むしろ、ヘブライ語、アラビア語<sup>(6)</sup>、そして時にはシリア語から、あるときは言

葉が、あるときは意味が、またあるときはその両者が同時に響いてくるはずである<sup>(7)</sup>。この書物全体は、ヘブライ人のもとでさえも、婉曲的であり、掴み難く、また修辞学者たちがギリシア語で「(言葉に) 綾あるもの<sup>(8)</sup>」と呼んでいるものと見なされている。つまりあることを語りながら、別のことを表現しているのである。喩えるなら、もしあなたがウナギやウツボをしっかりと手で掴んでおきたくても、より強く押さえつければ押さえつけるほど、素早く滑り出してしまうようなものである。私はこの巻物を理解するために、ヘブライ人のもとで第一人者だと見なされていた、あるリダ出身〈Lyddeus〉の教師に少なからぬ謝礼を支払ったのを覚えている<sup>(9)</sup>。彼の教えが何かしら役に立ったかどうかは分からないが、一つ言えるのは、先んじて理解していなければ、翻訳できなかったということである。

さて、巻物の最初のところからヨブの言葉までは、ヘブライ人のもとでは散文になっている〔ヨブ1:1-3:2参照〕。その先は、ヨブが「私が生まれた日は消え失せよ。そして『人を身ごもった』と言われていた夜も」〔ヨブ3:3〕と言っている言葉から、巻物が終わる前のところまで、すなわち「それゆえに私自身は跪き、灰と塵の中で悔い改める」〔ヨブ42:6〕までは、ヘクサメトロス（六脚韻）の詩になっている<sup>(10)</sup>。ダクテュロス（長短短格）とスポンダイオス（長長格）で進んでいくわけだが、これはつまり（ヘブライ語という）言語のイディオムのために、しばしば、同じ（数の）音節ではなく、同じ音量を有する別の詩脚をも受け入れているということである。時には、リズム自体も、法則に縛られぬ韻律によって、甘美で心地よいものとして流れていく<sup>(11)</sup>。このことは素朴な読者よりも韻律学者がよく理解するところである。しかし、上述したところ〔ヨブ42:6のあと〕から書物の終わりまでの、残りの小さな部分は、散文で編まれている。だがもし、ヘブライ人のもとでも確かに韻律があること、また我らが（ホラティウス・）フラックス<sup>(12)</sup>や、ギリシア人ピンダロス<sup>(13)</sup>、アルカイオス<sup>(14)</sup>、サッフォー<sup>(15)</sup>の様式で、詩編やエレミヤの哀歌、あるいは聖書のほとんどすべての詩歌が理解されるということが<sup>(16)</sup>、信じられないと思うのであれば、その者はフィロン<sup>(17)</sup>、ヨセフス<sup>(18)</sup>、オリゲネス、カイサリアのエウセビオスを読んでみればいい。そうすれば、彼らの証言によって、私が正しいことを言っていると認されることであろう。

それゆえ、私に吠え立てる犬どもは、何故私がこの巻物に骨を折ってきたかに耳を傾けるべきである。私は古代の翻訳を非難するためにそうしたのではない。むしろ、その翻訳において不明瞭であったり、削除されたり、あるいは明らかに写字生らの過失によって歪められてしまったりしているところを、我々の翻訳によって、より明確なものとするためにそうしたのだ。かくいう我々は、ヘブライ語は幾分か学んだし、またラテン語については、ほとんどおむつを付けている頃から、文法学者や修辞学者

や哲学者の間で鍛えられてきたのである。ところが、セプトゥアギンタの版のあと、もはやキリストの福音が煌めいているというのに、ギリシア人たちのもとでは、ユダヤ人アキラ、シュンマコス、テオドティオンら、ユダヤ化した異端者たち（の翻訳）が受け入れられている。彼らは救い主の多くの神秘を偽りの翻訳によって秘置したのだが、他方で（彼らの翻訳は）、教会では「ヘクサプラ<sup>(19)</sup>」の中に納められ、聖職者たちによって解き明かされているような始末である。こういう次第であるならば、一層のこと私は、気難し屋で意地の悪い読者から拒絶されてはならないのではあるまいか。なぜなら私はキリスト者の両親から生まれ、十字架の旗を我が前面に掲げるキリスト者なのであり、その関心はひたすら、削除されたところを回復すること、歪められたところを修正すること、教会の秘蹟を純粹で信頼できる言葉で開示することだったのだから。金色や銀色に輝く羊皮紙に書かれた古い書物、あるいは俗に言う大文字書体<sup>(20)</sup>で書かれた古い書物を欲しがるような者たちは、冊子ではなく畑で採れた何か重い物でも持っているがよい。私や私の仲間に対し、連中は、粗末な紙片<sup>(21)</sup>や、きれいというよりはつぎはぎだらけの冊子を持つことを認めているにすぎない。ギリシア人に相応しいように訳されたセプトゥアギンタと、ヘブライ人を頼りに訳された私の訳の両方の版を、私は骨折ってラテン語に翻訳した。（これらのうち）各人は好きなものを選べばよいが、（ただし）自分が意地悪なのではなく、学問的に熱心であることを証明すべきである<sup>(22)</sup>。

#### 序文終わり

#### 訳注

- (1) 逐語訳、意識、その中間の訳のこと。
- (2) ある時期まで、ラテン語で「旧約聖書」「新約聖書」と言う場合、*Vetus / Novum Testamentum*ではなく、*Instrumentum*という語が用いられていた。前者を聖書の名称として使った最古の例は、3世紀のテルトゥリアヌスであるが、彼自身が好んでこの語を使ったのではなく、本来ならば *Instrumentum* としたいところを、*Testamentum* が当時慣例化しつつあったため、仕方なくそう書いたのだという（田川建三『書物としての新約聖書』（勁草書房、1997年）13-14頁）。ヒエロニムスがここで *Vetus Instrumentum* としているのは、彼の時代にはまだ用語の統一が為されていなかったからかと思われる。なお彼は、エズラ記や五書の序文においては、*Vetus Testamentum* という語も用いている。
- (3) オリゲネス当時の *LXX* ヨブ記は、現存する *LXX* 写本やマソラー・テキストと

比べて短かった。オリゲネスはこの短いテキストに、よりヘブライ語原典に近いテオドティオン訳の詩句を付け加え、その付加部分にはアステリクス記号を付したのである (Swete, H. B., *An Introduction to the Old Testament in Greek* (Oregon: Wipf and Stock Publishers, 2003 [1902]): 255. アステリクス・オベルス記号については、石川立／加藤哲平「ヒエロニムス「ウルガータ聖書序文」翻訳と注解 (1)」『基督教研究』71巻2号 (2009年) 141-161頁、特に144-45頁の注 (2)、または手島勲矢『ユダヤの聖書解釈』(岩波書店、2009年) 61-84頁を参照せよ)。ヒエロニムスはヘブライ語原典から翻訳しているため、当然 LXX よりも長くなっている。

- (4) ヒエロニムスは、ヨブ記に関して、ヘブライ語から直接翻訳する前に一度、テオドティオン訳を含むヘクサプラの LXX を底本として翻訳を作っており (387年頃)、同時に、詩篇、歴代誌、ソロモンの書物 (箴言、コーヘレト書、雅歌) などの翻訳も作成した。このときの詩篇は「ガリア詩篇」という別名を持っている (「ガリア詩篇」については、石川／加藤「ヒエロニムス「ウルガータ聖書序文」翻訳と注解 (1)」143頁を参照せよ)。文中の、「我々が少し前にアステリクスとオベルスを付けて出版した翻訳」とは、このときの訳のことを指している。「より以前のもの」とは、古ラテン語訳のこと。
- (5) この箇所は、英語・日本語の先行訳では、次のように訳されている (Schaff, P. / Wallace, R. H. (eds.), *Nicene and Post-Nicene Fathers: Second Series* (New York: The Christian Literature Company, 1893) VI: 491; 小高毅編『原典古代キリスト教思想史3: ラテン教父』(教文館、2001年) 196頁)。「ラテン〔語の諸写本〕では、アステリクスとオベリクスを付して最近になって私が刊行した翻訳の前には、およそ700行もしくは800行が欠けていたのである」(小高訳)。つまり先行訳は、もともとの LXX を底本とした古ラテン語訳では、テオドティオン訳を含むヘクサプラの LXX を底本としたヒエロニムスのラテン語訳に比して、700から800行が「欠けている」という意味に取っている。しかし原文には行数が「欠けている」とは書いていない。私見では、むしろこれは古ラテン語訳ヨブ記の全体の行数のことを指しているように思われる。すなわち、古ラテン語訳およびもともとの LXX のヨブ記は全体で700から800行あるわけだが、それはもっと長いはずの本来のヨブ記から、「切り詰められ、損なわれ、齧り取られた書物」であったと説明しているということである。原文は以下のとおり。Ceterum apud Latinos ante eam translationem quam sub asteriscis et obelis nuper edidimus, septingenti ferme aut octingenti versus sunt, ut decurtatus et laceratus conrosusque liber foeditatem sui publice legentibus praebeat.

- (6) ダニエル書の序文において、ヒエロニウムスは、「ヨブ記（の文言）がアラビア語と非常に多くの結びつきを持っている」と述べている（石川／加藤「ヒエロニウムス「ウルガータ聖書序文」翻訳と注解（1）」156頁と注（5）を参照せよ）。ここで彼が言う「アラビア語」と現在のそれとは同一視できない。また、ヨブ記のどのあたりが「アラビア語」と関係しているのかも定かでない。
- (7) こうした記述から、ヒエロニウムスがアラビア語、シリア語等を解したと考える学者もいるが、Moritz Rahmer は本序文に登場する「リダ出身の教師」がこの二つの言語にも精通していたのであり、ヒエロニウムスはそれを又聞きしたにすぎないと述べている（Rahmer, M., “Hieronymus und seine jüdischen Lehrer,” *Die hebräischen Traditionen in den Werken des Hieronymus* (Breslau: Verlag der Schletter’schen Buchhandlung, 1861): 5-16の特に10-11を参照せよ）。
- (8) εσχηματισμενος（原文の通り、アクセント・氣息記号は付さない。以下同様）。副詞形の ἐσχηματισμένως は、①「比喩的に」（アレクサンドリアのオリュンピオドロス：6世紀, *fragmenta ex commentariis in Job* 8:21）、②「見せかけのやり方で、不正に」（カイサリアのバシレイオス：379年死去, *regulae fusius tractatae* 20.3）、③「密かに」（アタナシオス・スコラスティコス：6世紀, *collectio novellarum constitutionum* 1.1）という意味だとされている（Lampe, G. W. H., *A Patristic Greek Lexicon* (Oxford: Clarendon Press, 1961): 552）。より古くは、修辞学者アプシネスの著作や、喜劇作家アリストファネスの『プルトス』のスコリアでは、「比喩的に」という意味で、また哲学者アレクサンドリアのヘルミアスの著作では、「人工的に」という意味で用いられている（Liddell-Scott-Jones, *A Greek-English Lexicon* (Oxford: Clarendon Press, 1968): 700）。ここでヒエロニウムスが言う「修辞学者たち」が誰を指しているかは不明である。
- (9) 「リダ」とは、ユダヤ地方のヤッファ近郊の町 Lydda のこと。この地名は、使徒言行録9:32; 35; 38にも出てくる。リダ出身のユダヤ人教師について、ヒエロニウムスは *Commentariorum in Abacuc libri* 2.15ff. でも触れており、そこではこの教師を、sapiens や δευτερώτης と呼んでいる。これはヘブライ語でユダヤ賢者を指す、מִדְּבַר (ハハム) と מִדְּבַר (タナ) を直訳したものと思われる（Sutcliffe, E. F., “St. Jerome’s Pronunciation of Hebrew,” *Biblica* 29 (1948): 112-25; Rahmer, “Hieronymus und seine jüdischen Lehrer,” 5-16等を参照せよ）。
- (10) ギリシア・ラテン詩は、長音節と単音節の規則的な組み合わせから韻律を作る。ダクテュロス (dactylus) とは、長音節1つと単音節2つの組み合わせであ

り、スpondeus (spondeus) とは、長音節2つの組み合わせである。こうした単位を「脚」(pes) と呼ぶ。このダクテュロスあるいはスpondeusを六脚重ねたものが、ヘキサメトロス (hexametrus) と呼ばれる韻律である。なお、短音節2つで長音節1つ分となるので、ダクテュロスとスpondeusは基本的には交換可能であるが、五脚目は必ずダクテュロス、六脚目はスpondeusあるいはトロカイオス (長短格) になると決まっている (Halporn, J. W. / Ostwald, M. / Rosenmeyer, T. G., *The Meters of Greek and Latin Poetry: Revised Edition* (Indianapolis: Hackett Publishing Company, 1994): 10-12; 67-71)。問題は、本当にヘブライ語のヨブ記がそうした韻律で書かれているのかどうかであるが、少なくともヘキサメトロスでは書かれていない。詩篇などの聖書のヘブライ詩には、「並行法」「拍構造」「韻」など、詩としての形式上の特徴が見受けられるといわれるが、ギリシア・ラテン詩のような意味での韻律は存在しない (石川立「ヘブライ詩歌の技法」『聖書学用語辞典』(日本キリスト教団出版局、2008年) 311-12頁を参照せよ)。ヒエロニムスは、ラテン語読者に対してヘブライ詩を説明するに当たって、イメージが湧きやすいようにヘキサメトロスの話を持ち出したのかもしれないし、あるいは彼自身若いころにラテン詩に親しんでいたことから、詩と聞いてすぐに韻律を思い浮かべたためにそうしたのかもしれない。なお、ヘブライ詩においても、中世になるとアラビア詩の技法を取り入れて、音節の長短による韻律を持ったものも書かれた。

- (11) ホラティウス『歌集』4巻2歌11-12行を参照。

verba devolvit numerisque fertur  
lege solutis.

「(ピンダロスは) 言葉を転がし、  
法則に縛られぬ韻律によって流れていく」

- (12) クイントゥス・ホラティウス・フラックス (65BCE - 8BCE)。ローマの抒情詩人。南イタリアのウェヌシア生まれ。ローマやアテナイで学び、オクタウィアヌスの庇護のもとで、『風刺詩』『エポディ』『歌集』『書簡詩』等の作品を残した。
- (13) ピンダロス (c. 518BCE - c. 438BCE)。ギリシアの抒情詩人 (合唱歌)。ポイオティア生まれ。古代ギリシアで開催されていた4つの運動競技大会で、勝利者を讃える、『オリュンピア競技祝勝歌』『ピュティア競技祝勝歌』『ネメア競技祝勝歌』『イストミア競技祝勝歌』等の作品を残した。
- (14) アルカイオス (c. 620BCE - ?)。ギリシアの抒情詩人 (独唱歌)。レスボス島生まれ。政治的な活動をしていたが、一方で『アポロンへの讃歌』などの抒情詩

を残した。

- (15) サッフォー (c. 630BCE - ?)。ギリシアの女流抒情詩人 (独唱歌)。レスボス島生まれ。貴族の家系に生まれ、同性への恋情を綴った抒情詩を残した。中でも作品31番は有名である。
- (16) ここでのヒエロニムスの説明は不可解である。というのも、彼は先にヨブ記がヘクサメトロスで書かれていると説明していたが、そのあとで例示しているギリシア・ローマの詩人たちは、ヘクサメトロスを用いる叙事詩 (epic) の詩人として有名なわけではないからである。彼らはむしろ抒情詩 (lyric) と呼ばれる形式で詩を書いた。抒情詩には、詩人がひとりでリラと呼ばれる楽器を奏でながら歌う独唱歌と、合唱隊 (コロス) が祭礼の際に歌う合唱歌とがあり、アルカイオス、サッフォーは前者、ピンダロスは後者の作品を残している。ホラティウスは、のちにギリシアで絶えて久しかったこのスタイルを、ラテン詩において復活させた。事実ヒエロニムスが文章の中に織り込んでいる『歌集』4巻2歌も、サッフォー風スタンザと呼ばれる韻律である。おそらくは、彼はヨブ記がヘクサメトロスで書かれたことを説明したあと、より一般的な説明として、その他のヘブライ詩も抒情詩のごとく多様な韻律で書かれたのだと言いたいのであろう。あるいは、韻律というよりジャンルの差を説明したいのかもしれない。いずれにせよ、系統を同じくする詩人たちの名が挙がっていることから、ヒエロニムスの何らかの意図が感じられるが、「詩編やエレミヤの哀歌、あるいは聖書のほとんどすべての詩歌」も、抒情詩の韻律を持っているとは言い難い。抒情詩については、逸身喜一郎『ギリシャ・ローマ文学 — 韻文の系譜 —』(放送大学教育振興会、2000年) 208-54頁を参照せよ。
- (17) アレクサンドリアのフィロン (*De viris illustribus liber* 11、以下 *vir. ill.* と略す)。c. 15BCE - 45CE。ユダヤ人哲学者。ギリシア哲学を聖書解釈に援用した。『世界の創造』等の哲学的著作をはじめ、『十戒について』『律法について』『モーセの生涯』等の聖書解釈書も残している。中でも『観想的生活』は、エッセネ派についての古代の証言として重要である。のちにオリゲネス、エウセビオス等のキリスト教教父によく読まれた (Kamesar, A. (ed.), *The Cambridge Companion to Philo* (Cambridge University Press, 2009) を参照)。
- (18) フラウィウス・ヨセフス (*vir. ill.* 13)。c. 37CE - 100CE。ユダヤ人歴史家。『ユダヤ戦記』『ユダヤ古代誌』『アピオンへの反論』等の著作を残した。66-70年のユダヤ戦争において、ユダヤ側の指揮官として従軍するが、ローマに投降。ウェスパシアヌス帝やティトゥス帝の庇護の下で、ユダヤの歴史を著述した。彼の著作は、イエスについてのユダヤ側の証言として (『ユダヤ古代誌』

18巻63)、中世に至るまでキリスト教徒によく読まれた。

(19) *εξαπλοῖς*.

(20) *uncialis* とは、いわゆる「アンシャル字体」のこと。「*uncial*」という語は、『12番目の部分』を意味するラテン語の *uncia* から派生した。すなわち、この語は通常の長さの1行の12分の1を占める書体に適用されるようになったのである(メツガー、B・M『新約聖書の本文研究』(橋本滋男訳、日本基督教団出版局、1999年) 251頁)。つまり、写本上の1行を12文字程度で書くことができるほどの大きさの文字を「アンシャル字体」というのである。

(21) ここで「紙片」と訳した原語は *scidula* であるが、*scindula* のことかと思われる。異読はない。

(22) 英訳は、原文の *studiosum se* を *studiosum me* と読み換えて、「(各人は) 私の熱心さを認めるべきである」としているが、本稿では原文に従って、「(各人は) 自分自身の学問的誠実さを証明するべきである」という意味で訳した(Schaff / Wallace, *Nicene and Post-Nicene Fathers: Second Series VI*: 492を参照せよ)。

## 十二預言書の序文

### 解題

短い序文だが、多くの情報を含んでいる。中でも、LXXとタナッハでは十二預言書の順序が異なっており、ウルガータではタナッハの順序に合わせて配置されていることや、「マラキ」が「エズラ」と同一視されるという「ヘブライ人」の証言が存在することなどは重要である。特に後者に関しては、後代に編纂されたユダヤ伝承上でも確認されるものであり(注3を参照せよ)、ここからは、この伝承の起源が少なくともヒエロニウムスの時代にまで遡れるものであることが分かる。ちなみに「十二預言者」という名称もあるが、ヒエロニウムスが *Duodecim Prophetarum* としているので、本稿では合わせて「十二預言者」とした。序文自体は、392年頃パウラとエウストキウムに宛てて書かれた。

### 翻訳

#### 十二預言者の序文が始まる

十二預言者はヘブライ人たちのもとでは、我々のもとにあるそれとは同じ順番になってはいない。だからそこ(ヘブライ人たちの聖書)で読まれることに従って、こ

こ（ウルガータ訳）でも（同じように）配置されているのである<sup>(1)</sup>。ホセア〈Osee〉は小さな章に分けられており<sup>(2)</sup>、あたかも警句を通して語っているかのようである。ヨエル〈Iohel〉は最初は平明だが、終わりの方は不明瞭である。そしてマラキ〈Malachia〉に至るまで、それぞれが自らの独自性を持っている。ヘブライ人たちはマラキを、書記であり律法学者であるエズラであると見なしている<sup>(3)</sup>。しかし今すべてのことについて言うと長くなってしまうので、次のことだけを、おおパウラとエウストキウムよ、あなたがたに注意していただきたい。つまり十二預言者は一冊の書物であること、ホセアとイザヤとは「同時代人<sup>(4)</sup>」であること<sup>(5)</sup>、そしてマラキが本当はハガイ〈Aggei〉とゼカリヤ〈Zaccharia〉の時代にいたことである<sup>(6)</sup>。ある者たちについては、年代が表題に示されているわけではなく、かの王たちのもとで彼らが預言したということが示されている<sup>(7)</sup>。そうした王たちのもとで、彼らより前に表題を持っている者たち（イザヤ・エレミヤ・エゼキエル）もまた預言したのである。

#### 序文終わり

#### 訳注

- (1) 十二預言書は、LXXでは、ホセア・アモス・ミカ・ヨエル・オバデヤ・ヨナ・ナホム・ハバクク・ゼファニヤ・ハガイ・ゼカリヤ・マラキであるのに対し、ウルガータはタナッハと同様に、ホセア・ヨエル・アモス・オバデヤ・ヨナ・ミカ・ナホム・ハバクク・ゼファニヤ・ハガイ・ゼカリヤ・マラキの順になっている。
- (2) 「ホセアは小さな章に分けられており」〈Osee commaticus est〉。この *commaticus* は古典期には見られない言葉であるが、ヒエロニムスの著作の中にはしばしば出てくる。*vir. ill.* 131; *Ep.* 112. 4など (Blaise, A., *Dictionnaire Latin-Français des Auteurs Chrétiens* (Turnhout: Éditions Brepols, 1954): 172)。
- (3) マラキをエズラと同一視するユダヤ伝承は、タルムード（メギラー15a）やタルグム・ヨナタンに見られる。タルムードでは、マラキ2:11の「異教の神を信じる娘」は、エズラ10:2の「異教の娘」を指すと解釈され、そこから、その「異教の娘」たちを離縁させたエズラはマラキと同一視できると説明されている。ところで、そもそも「マラキ」という名は、マラキ3:1の「我が使者」〈מַלְאָכִי〉に由来するものであり、歴史的には個人名かどうかとも定かではないのだが、ヒエロニムスは固有名詞として考えているようである（ユダヤ教古典テキストは、Bar-Ilan University Responsa Project Version 17から引用する。以下同様）。

אמר רבי יהושע בן קרחה : מלאכי זה עזרא, וחכמים אומרים : מלאכי שמו. אמר רב נחמן : מסתברא כמאן דאמר מלאכי זה עזרא, דכתיב בנביאות מלאכי : +מלאכי ב' + בגדה יהודה ותועבה נעשתה בישראל ובירושלם כי חלל יהודה קדש ה' אשר אהב ובעל בת אל נכר, ומאן אפריש נשים נכריות - עזרא, דכתיב +עזרא י' + ויען שכניה בן יחיאל מבני עילם ויאמר לעזרא אנחנו מעלנו באלהינו ונשב נשים נכריות.

「ラビ・ヨシュア・ベン・コルハ曰く、『我が使者（マラキ）とはエズラのことである』。しかし賢者たち曰く、『〈マラキ〉とは彼の名前である』。ラブ・ナフマン曰く、『マラキをエズラであると言う者は正しい。マラキの預言には次のように書かれている。《ユダは裏切り、イスラエルとエルサレムでは忌むべきことが行われている。ユダは、主が愛する主の聖なるものを汚し、異教の神（を信じる）娘を娶っているのである》〔マラキ2:11〕。では異教の娘たちを遠ざけたのは誰かといえば、エズラである。次のように書かれている。《エラムの一族のエヒエルの子シェカンヤはエズラに答えて言った。「我々は（神に）背き、異教の娘たちを住ませた」》〔エズラ10:2〕』

(4) συγγρονον.

(5) ホセアとイザヤが「同時代人」であることは、それぞれの表題から判断される。「ユダの王、ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの時代…」〔ホセア1:1〕、「…これはユダの王、ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの治世のことである」〔イザヤ1:2〕（共に新共同訳）。

(6) 聖書中では、エズラ5:1; 6:14に、ハガイとゼカリヤについての言及があり、またそれぞれ冒頭に、「ダレイオス王の第二年六月一日に…」〔ハガイ1:1〕、「ダレイオスの第二年八月に…」〔ゼカリヤ1:1〕と書かれていることから、二人が同時代人であったことが伺われるが、マラキについての言及はない。注(3)で述べたように、そもそもマラキは個人名かどうか定かでないため、こうした比較自体が成り立たないのかもしれない。しかし、たとえばタルムード（ヨマー9b）においては、マラキは個人名として現れ、かつ三者は一セットのものとして考えられている。

משמתו נביאים האחרונים חגי זכריה ומלאכי נסתלקה רוח הקודש מישראל, ועדיין היו משתמשין בבת קול.

「後の預言者たちであるハガイ、ゼカリヤ、マラキが死んでから、聖霊はイスラエルから離れ去ってしまったが、なおも彼らは天の声（バト・コール）を用いているのだった」

他に、タルムード（メギラー3a）なども参照せよ。

(7) ホセア・アモス・ミカ・ゼファニヤなど、表題に年代は書かれていないが、どの王の時代であったかについては書かれている預言書のこと。「ユダの王ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの時代に、モレシエトの人ミカに臨んだ主の言葉…」

[ミカ1:1]。

## イザヤ書の序文

### 解題

ヒエロニムスは、自らのイザヤ書翻訳が「コロンやコンマによって」書かれていることを述べたあと、イザヤ書に関して2点重要なことを述べている。まずは、イザヤの語り口が「雄弁」であること、そしてイザヤは「預言者というよりは、むしろ福音書記者」であることである。前者の証言はエレミヤ書、エゼキエル書との比較の中で言われていることであり、これらの翻訳および序文が一気に書かれたことを伺わせる。また後者の証言は、ヒエロニムスの「ヘブライカ・ウェリタス」という独特な論理を背景にしたものであり、注目に値する。中盤に出てくる「読者諸氏」へのお願いは、たとえばヨブ記と比べると、かなり穏当な言い回しにはなっているが、やはりここでも、自らの翻訳に対して非難するならば、学問的な誠実さに基づいてすべきだという一点だけは譲らない。序文自体は393年頃、パウラとエウストキウムに宛てて書かれた。

### 翻訳

#### 預言者イザヤにおけるヒエロニムスの序文が始まる

誰も預言書が韻文で書かれているとは見なさなかったもので、それらがヘブライ人のもとでは韻律と結びついており、詩篇やソロモンの作品と似ているところがあるとは思わないかもしれない。しかしながら、デモステネス<sup>(1)</sup> やトゥッリウス（・キケロー）の場合、彼らはいくまでも韻文ではなく散文で書いたとはいえ、（その文章は）コロンやコンマによって書かれるのが通常であるから<sup>(2)</sup>、我々としても、読者諸氏の利便に配慮して、新しい訳を新しい書き方で（古い訳から）区別した。イザヤについてまず知っておくべきは、彼が雄弁な〈disertus〉言葉遣いをしているということである<sup>(3)</sup>。まさに高貴でかつ都会風の優美さを持った者のように、語り口に田舎臭さの混じっているところなど微塵もない。それゆえに、とりわけ彼の言葉の華やぎを翻訳によって保持することができないという事態が生じたのである。次にまた付け加えておくべきは、イザヤは預言者というよりは、むしろ福音書記者と言うべきだということである<sup>(4)</sup>。なぜならイザヤはキリストと教会の全神秘を明らかにすべく追求したからであり、それは、彼が未来の出来事について預言しているのではなく、過去について述べているのだというあなたのお考え通りである<sup>(5)</sup>。セプトゥアギンタの翻訳者た

ちは当時、自分たちの信仰の秘蹟を異教徒に明示したいとは思わなかったのだろうと私は推測する<sup>(6)</sup>。彼らは犬どもに聖なる事柄を、また豚どもに真珠を与えることのないようにしたのである〔マタイ7:6参照〕。彼らによって秘匿されたその秘蹟に対して、あなたがたはこの版を読むときに注意を向けるべきであろう。

私は、預言者を理解することがどれほどの骨折りであるかを知らないわけではない。また、誰かがこれから読むこと（内容）を先んじて理解していなければ、その訳について評価するのが容易ではないと知らないわけではない。さらにまた、我々が多くの者たちの悪口雑言にさらされていることも知らないわけではない。連中は、嫉妬に駆られて、自分たちが把握できないことを見下しているのである。それゆえ、（そのようなことを）私は重々承知の上で火中に手を入れているわけだが<sup>(7)</sup>、それにもかかわらず、気難し屋の読者諸氏にお願いしたい。すなわち、読者諸氏には、ギリシア人たちのように、以前のいくつかの翻訳の次に、少なくとも一つ、別の翻訳を持つのがよいと考えていただきたいのである。ギリシア人たちは、自らの教義の勉強のために、あるいはアクイラ、シュンマコス、テオドティオン（の訳）を集めて比べることによってさらにセプトゥアギンタを理解するために、セプトゥアギンタの訳の次に、それらの諸訳を読んでいる。読者諸氏は、正当な判断からではなく、憎しみに根差した無自覚の前提ゆえに断罪したと思われなくては、まず読み、（見下すのであれば）そのあとで見下すべきである。

ところで、イザヤは（イスラエルの）十部族がまだ捕囚の身となって連れ去られる前に、エルサレムとユダで預言した<sup>(8)</sup>。両方の王国について彼は、時には混ぜこぜに、また時には別々に神託を織りこんでいる。彼は、現在の歴史を（未来の視点から）見返したり、バビロン捕囚のあと人々がユダに帰還することを予告したりしているが、そのときも、彼の関心事はもっぱら異邦人の招きとキリストの到来についてなのである。あなたがたは、おおパウラとエウストキウムよ、その愛と同じほどの熱心さで、キリストに請い求めていただきたい。絶えず私を引き裂く敵どもの今の嫉妬心の代わりに、キリストご自身が将来私に報いてくださるようにと。キリストは、私がこの（翻訳の）ために、外国語の研究に汗水たらしたことを知っておられる。これはもとより、ユダヤ人たちが聖書（翻訳）の誤りに関して、彼（キリスト）の教会をこれ以上侮辱することがないようにするためであった<sup>(9)</sup>。

序文終わり

## 訳注

(1) デモステネス（384BCE -322BCE）。ギリシアの政治家・雄弁家。マケドニア

の支配に抵抗し、ポリスの独立を求めたが叶わず、服毒死した。『フィリッピカ』等の弁論書を残している。

- (2) ここで言う、「コロンの」(colon)、「コンマ」(comma)は、英語で言うところの句読点の意味は持っていない。修辞学用語としての「コロンの」は文法上の「節」、「コンマ」は「句」を指す。ちなみに「ピリオド(ペリオドス)」(periodus)は「完全文」、とりわけ従属節を伴う「複文」の謂であり、このペリオドスの構成要素として「コロンの」「コンマ」があるのである。修辞学では、先に従属節が三つほど続いたあとに主節が来る、「クリマクス(漸増法)」(climax)という修辞法を用いた文章が美しいとされた。これらギリシア語で「文」・「節」・「句」に当たる言葉が、いつごろから、英語のように句読点の意味として用いられるようになったかは不明である(柳沼重剛「ピリオド、コロンの、コンマ」『語学者の散歩道』(岩波現代文庫、2008年)169-73頁)。ここでヒエロニムスの説明は、デモステネスやキケローのような弁論家は、散文ではあるけれども、「コロンの=節」や「コンマ=句」を用いた修辞学的に美しい文章を書いたわけだから、自分もそれに倣ってイザヤ書を翻訳したという意味であろう。
- (3) ヒエロニムスは三者の語り口をそれぞれに比較して、相関的に説明している。彼によると、イザヤは雄弁 <disertus>、エレミヤは素朴 <rusticus>、そしてエゼキエルはその両者からほどよく調和のとれたもののものであった <nec satis disertus nec admodum rusticus est, sed ex utroque medie temperatus> という。エレミヤ書、エゼキエル書の序文を参照。
- (4) キリスト教徒によるイザヤに対するこうした評価は、イザヤ7:14の、いわゆる「インマヌエル預言」を、イエスについての預言〔マタイ1:23〕と解釈することに由来する。
- (5) ここで言う「未来」「過去」とは、共に、イザヤの時代ではなく、ヒエロニムスの時代から見たものである。彼によれば、イザヤの預言とは、彼の時代から見た「未来」、すなわちまだ成就していない預言を述べたものではなく、すでに成就した「過去」、すなわち「キリスト(の到来)と教会の全神秘」を述べたものだった。これが、「イザヤは預言者というよりは、むしろ福音書記者とすべき」という一文の意味である。
- (6) この「推測」については、*Quaestionum Hebraicarum liber in Genesim* 序文を参照せよ。ヒエロニムスはそこで、『アリストテアスの手紙』による LXX の成立縁起をもとにして、LXX に対する独自の評価を述べている。伝説上では、LXX は、プトレマイオス王フィラデルフォスの命により、エルサレムから呼び寄せ

られた72人の長老によって翻訳されたことになっている。そしてその際、長老たちは特別な歓待を受けたという。ヒエロニムスによれば、その歓待の理由は、フィラデルフォス王がユダヤ人の長老たちを、自分と同じ「唯一の神」を信仰していると見なしていたためであった。むろん王にとっての「唯一の神」とは「プラトンの神」であり、ユダヤ人の神とは別物である。そこで、このことが王に露見してしまうのを恐れた長老たちは、翻訳の際に聖書の文言を変えらることによって、聖書の「唯一の神」を隠蔽し、王の「唯一の神」に合わせてしまった。そうすることで、彼らは、「犬どもに聖なる事柄を、また豚どもに真珠を与えることのないよう」、ヘブライ語原典に書かれていたはずの「秘蹟」（例えばヒエロニムスが言う、イザヤが明らかにすべく追求した、キリストと教会の全神秘）を、LXXには反映させなかったというのである。

- (7) 「火中に手を入れる」〈in flammam mitto manum〉。慣用句のようだが、ヒエロニムス当時のラテン語の慣用句か。危険を承知でその中に飛び込むという意味であろう。
- (8) 「アモツの子イザヤが、ユダとエルサレムについて見た幻。これはユダの王、ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの治世のことである」〔イザヤ1:1〕（新共同訳）。十二預言書の序文も参照せよ。
- (9) ここで「侮辱する」と訳した原語は、**insultare**で、もともとは「跳ねまわる」の意。ユダヤ人が、LXXや古ラテン語訳にある翻訳上の間違いを見つけ、「跳ねまわ」って喜ぶさまを皮肉っている。

## エレミヤ書の序文

### 解題

エレミヤの語り口についての説明から、イザヤ書、エゼキエル書の序文との比較を前提として書かれた序文だと推測される。列王記の序文などでも見られるように、本序文でも哀歌はエレミヤの作だと考えられている。また非常に重要なことに、LXXエレミヤ書とヘブライ語エレミヤ書とに異同がある場合、ヒエロニムスはヘブライ語原典こそに依拠すべきだと言明しており、かつその際のヘブライ語原典は現在のマソラー・テキストに限りなく近いものとなっている。これはクムラン写本などを含む聖書の本文批評の分野でも考慮されるべき証言だと思われる。序文自体は393年頃書かれた。名宛て人は文中には出てこないが、おそらくパウラとエウストキウムが念頭に置かれている。

## 翻 訳

### 預言者エレミヤの書におけるヒエロニウムスの序文が始まる

預言者エレミヤは — この序文は彼のために書かれているが —、ヘブライ人のもとでは、表現に関しては確かに、イザヤやホセアや他の預言者たちに比べてより素朴である〈rusticior〉と考えられている<sup>(1)</sup>。しかし、その意味（内容）に関しては遜色がない。なぜなら、彼は同じ霊によって預言したからである。ところで、彼の語り口の単純さは、彼が生まれた場所に由来するものである。彼はアナトトの人であった。その地は今日でもなお、エルサレムから3マイル<sup>(2)</sup>ほど離れた寒村として存在している。彼は祭司の家系から出た祭司であり、母親の胎にいたときに聖別され〔エレミヤ1:5参照〕、自らの純潔をもって、福音を伝える者（として自ら）を捧げた〔エレミヤ1:6参照〕。彼は若者のときに預言をはじめ、都市（エルサレム）とユダの捕囚を、霊によってのみならず、肉の目によっても目撃したのだった。（当時すでに）一方ではアッシリア人がイスラエルの十部族をメディア人の中に移し、他方では異邦人の植民者たちがイスラエルの部族の土地を所有していた。それゆえに彼はユダとベニヤミンにおいてのみ預言し、自らの国の没落を、四重のアルファベット<sup>(3)</sup>をもって詠嘆したのである〔哀歌1:1-4:22参照〕。この四重のアルファベットについては、我々はメトロンの音量と詩行によって再現した<sup>(4)</sup>。そのうえまた、我々は、ギリシア人やラテン人のもとではまったく混乱してしまっている幻視の順序を、往時の信頼に足るものへと修正した<sup>(5)</sup>。しかし彼の書記であるバルクの書は、ヘブライ人のもとでは読まれてもいないし、持たれてもいないので、我々はこれを省いたが<sup>(6)</sup>、これらすべてのことゆえに、嫉み深い連中から誹謗中傷されることが予想される。私としては彼らに対し、その度に小品でも書いて応酬する必要がある。だいたいこんなことを私が耐え忍んでいるのは、あなたがた（パウラとエウストキウム）がそれを強いるからである。それがなければ、（かつては）悪を抑えるためには、毎日何か新しい書き物をして嫉妬深い連中の狂気を挑発するよりも、彼らの凶暴さを私の沈黙で抑えてやることの方がより適切だったのである。

### 序文終わり

## 訳 注

- (1) エレミヤの語り口については、イザヤ書の序文注（3）を参照せよ。
- (2) ここでいう「マイル」とは、ローマ・マイルとも呼ばれる mille passus のこと。これは1000 passus（1 passus = 5pedes = 1.48m）の意であり、1480mに相

当する（英マイルよりも短い）。ゆえに3マイルで約4.5km。ちなみにアナトトはレビ人（祭司）の町であったとされている〔ヨシュア21:18参照〕。

- (3) 哀歌は「キノット」として、エレミヤの作だと考えられていた（石川／加藤「ヒエロニウムス「ウルガータ聖書序文」翻訳と注解（1）」148-55頁、列王記の序文を参照せよ）。哀歌1:1-4:22は、一節ごとに語頭の文字が、ヘブライ語のアレフベート順（acrostic）になっている。ヒエロニウムスは、そうした形式が4回繰り返されることを、「四重のアルファベット」〈quadruplex alfabetum〉と呼んでいるのである。
- (4) 「メトロンの音量と詩行によって」〈mensurae metri versibusque〉。解釈の難しい一節だが、ヒエロニウムスは次のようなことを言おうとしているように思われる。すなわち、「メトロンの音量によって」とは、例えばダクテュロス（長短短格）とスポンダイオス（長長格）のように、一つのメロン（韻律の単位）の内部で、音節の組み合わせは異なっても、音量は同じであるということである。また、「詩行によって」とは、定かではないが、ヘブライ語上でアレフから始まる一節の次に、ベートから始まる一節が来るように「改行する」ということか。
- (5) LXX エレミヤ書は、現在のマソラー・テキストとはかなり異なっている。何よりも、LXX はマソラーに比べて短く、加えて部分的に内容が前後したり、そっくり別の場所に移動していたりする。聖書学では長い間、これは LXX に改編が施されたためだと考えられてきたが、クムランの洞窟で、LXX の構成を支持するヘブライ語断片が発見されたため（4Qjer<sup>b</sup>、4Qjer<sup>d</sup>、4Qjer<sup>e</sup> 等）、一転して、むしろマソラー・テキストにこそ改編が施されていたのではないかという議論が持ち上がった。しかしこれはむしろ仮説の段階であり、エレミヤ書には、もともと短いヴァージョンと長いヴァージョンがあったという折衷的な案もある（Jobes, K. H. / Silva, M., *Invitation to the Septuagint* (Michigan: Baker Academic, 2005 [2000]): 173-77を参照せよ）。それに対しヒエロニウムスは、全面的にユダヤ人の聖書に依拠し、「まったく混乱してしまっている幻視の順序を、往時の信頼できるものへと修正した」と言って憚らない。たとえば、エレミヤ25:14以下において、LXX エレミヤ書は、突然マソラー上でいうところの49:34-39に移り、その後さまざまに入り組んだかたちで46-51章を配置したあと、ようやく25:15に戻ってくるのだが、一方ウルガータのエレミヤ書はマソラーどおりに続いている。こうしたことから、ヒエロニウムス当時のヘブライ語のエレミヤ書は、すでにマソラーと同じテキスト構成になっていたと推測できる。いずれにせよ、注目すべきは、ヒエロニウムスがこういった場合、LXX

ではなくユダヤ人の伝統こそを重要視していた事実である。

- (6) 『バルク書』は、LXXにおいてはエレミヤ書のすぐあとに配置されているが、ヒエロニムスはこれを外典に移した。

## エゼキエル書の序文

### 解題

エゼキエルの語り口についての説明から、イザヤ書、エレミヤ書の序文との比較を前提として書かれた序文だと推測される。ヒエロニムスは序文の中で、エゼキエル1:1に書かれた「第三十年」を、エゼキエルの年齢であるかのように述べているが、これは彼の聖書解釈によるものである。また序文の中にあるとおり、ヒエロニムスが *vulgata editio* という言葉を用いた場合、当然それは彼の「ウルガータ聖書」ではなく、当時の「普及版=LXX」を指している。序文自体は393年頃書かれた。名宛て人は文中には出てこないが、おそらくパウラとエウストキウムが念頭に置かれている。

### 翻訳

#### 預言者エゼキエルの序文が始まる

預言者エゼキエルは、ユダ王ヨヤキン〈Ioachim〉<sup>(1)</sup>と共に、捕囚の身となってバビロンに連れて行かれた。そこで彼は、彼と共に捕えられていた者たちに向かって預言した。彼らはエレミヤの神託との関わりの中で敵どもに自ら寝返ったことや、彼（エレミヤ）が落城すると予告したにもかかわらず、なおもエルサレムの都が存続すると考えていたことを悔やんでいた。彼（エゼキエル）は30歳のとき<sup>(2)</sup>、捕囚の5年目に、共に捕囚の身となっていた者らに向かって語り始めた。同じ頃、といっても（エゼキエルはエレミヤより）少しあとではあるが、エゼキエルはカルデアで、エレミヤはユダで預言した。エゼキエルの言葉はあまりに雄弁〈*disertus*〉というわけでも、素朴〈*rusticus*〉すぎるといってもなく、その中間でほどよく調和がとれている<sup>(3)</sup>。エレミヤと同様、彼も祭司であるわけだが、その巻物の最初と最後はきわめて分かりにくい。とはいえ、エゼキエル書の普及版〈*vulgata editio*〉<sup>(4)</sup>のほうも、ヘブライ語版とさほど違いがあるわけではない。それゆえに私が驚きを禁じ得ないのは、（セプトゥアギンタにおいて）もし、すべての書物を同じ翻訳者たちが訳したとすれば、彼らがある書物では同じ翻訳をしておきながら、別の書物では違う翻訳をするなどということが、どのような理由から生じたのかということについてである。し

たがって、この書物は是非我々の翻訳で読んでいただきたい。というのも、この訳はコロシとコンマをもって書かれているため<sup>(5)</sup>、より平明な意味（表現）を読者諸氏に提供しているからである。それでも、もし我が友人たちがこの訳にも文句を言うのなら、彼らに、誰もそんなことを書いてくれと頼んでなどいないと言ってやってくれたまえ。しかし、私は次のようなことが彼らの身に起こるのではないかと心配してしまう。すなわち、ギリシア語で言うとはっきりするのだが、彼らは「口汚い罵り屋<sup>(6)</sup>」と呼ばれてしまうのではないだろうか。

#### 序文終わり

#### 訳注

- (1) 原文は「ヨヤキム」〈Ioachim〉となっているが、「それは、ヨヤキン王が捕囚となって第五年の、その月の五日のことであった」〔エゼキエル1:2〕とあるとおり、「ヨヤキン王」が正しい。ヨヤキムはヨヤキンの父親である〔列下23:36-24:17参照〕。異読欄を見ると、写本によっては「ヨヤキン」〈ioachin〉となっている。
- (2) この記述は「第三十年の四月五日のことである…」〔エゼキエル1:1〕に由来するものであるが、聖書上の「第三十年」が何の年を指しているかは定かでない。ヒエロニウムスの序文では、原文が、「自身の年齢の三十年目に」〈Tricesimo autem aetatis suae anno〉となっていることから、ヒエロニウムスはエゼキエルの年齢だと解釈しているように思われる。ただし、ウルガータの同所では、単に「第三十年」と訳している。
- (3) エゼキエルの語り口については、イザヤ書の序文注(3)を参照せよ。また、イザヤ書やエレミヤ書に比して、エゼキエル書は預言を語る場面で、多くの場合、詩文形式ではなく散文調で書かれていることにも注目すべきである。
- (4) この場合の「普及版」〈vulgata editio〉とは、むろんヒエロニウムスのウルガータ聖書のことではなく、ヒエロニウムス当時「普及」していた「セプトゥアギンタ」のことである(Tkacz, C. B., “LABOR TAM UTILIS: The Creation of the Vulgate,” *Vigiliae Christianae* 50 (1996): 42-72の注2を参照)。文章自体は、エゼキエル書の「最初と最後はきわめて分かりにくい」が、補助としてLXXを参照しても、その分かり難さには「さほど違いがあるわけではない」というほどの意味か。
- (5) 「コロシ」「コンマ」については、イザヤ書の序文の注(2)を参照せよ。
- (6) φαγολοιδοροι.

## 注

- 1 翻訳・監修を石川が、翻訳・解題・訳注を加藤が担当した。
  - 2 訳注のギリシア・ラテン詩に関する部分は、平山晃司氏（大阪大学言語文化研究科専任講師）に校閲していただき、かつ貴重なコメントを賜った。ここに記して深謝する。
- \* 本稿は平成22年度科学研究費補助金ならびに日本学術振興会特別研究員研究奨励金による研究成果の一部である（加藤哲平）。